

20. $p\text{CO}_2$ の高度に減少した例および増加した例

(血液重炭酸緩衝系の実施臨床における重要性)

上野 正和・加藤 繁夫・石原 運雄
岩田 恵夫 (千葉労災病院内科)

酸塩基平衡の検討—臨床の実際においては血液重炭酸素の動き—は、患者の予後の概略の判定に重要な検査項目となることは、われわれはことに慢性腎炎において痛感している。かかる場合は $p\text{CO}_2 \cdot \text{HCO}_3^- \cdot \text{pH}$ と何れも低下するのであるが、一方、酸塩基平衡の異常を幅広く検討している中に、われわれは CO_2 narcosis と思われる著明な CO_2 蓄積の一例を経験した。

たしかに酸塩基平衡異常の是正は時に救命的な効果を認めるが、一方かかる異常の発現が動かしがたい重大な予後の指標となる場合も多い。

そこで今回は Astrup 法により得られたわれわれの臨床成績を、 $p\text{CO}_2$ 値を主体に $\text{HCO}_3^- \cdot \text{pH}$ とあわせ整理、検討して報告したいと思う。

21. 慢性蕁麻疹患者の人格特性

内海 滉 (国立国府台病院)

原 紀道 (千葉大学皮膚科学教室)

国立国府台病院ならびに千葉大学附属病院皮膚科外来を訪れた慢性蕁麻疹患者 58 例につき、YG, PF, SCT, ロールシャッハ法により心理学的な人格特性を測定し、パーソナリティの本疾患におよぼす機序を吟味した。

YG では本疾患は略々アトピー性皮膚症に近似するが、PF では無罰的傾向の少い点で円形脱毛症と異なりロールシャッハのパターンは従来諸家において唱えられた如き一元的なものでなく、a) 攻撃的、b) 非活動的、c) 逃避的諸グループに大別せらるる如き異質の集団が混在するが、各グループ間にも相互移行が考えられる。

22. 誘発脳電位の整形外科領域における臨床的応用について

○鈴木 弘祐・石川 芳光・高木 学治

宮坂 齋 (千葉労災病院整形外科)

最近、われわれはデジタル型医用電子計算機 (MC 401 型) を用いて、脊髄損傷および頸部挫傷 (所謂鞭打ち損傷) の患者約 50 例に対し、視覚誘発脳電位および体感覚性誘発脳電位の臨床的検索を行ない、2, 3 の知見を得たので報告する。

23. リハビリテーション領域における振動刺激の応用

山中 力 (千葉大学整形外科学教室)

人体の骨格筋に機械的振動を与えると、その骨格筋の固有反射が振動頻度により促進や抑制が起こることが分かっている。

リハビリテーション領域においてこれらの神経筋系に与える振動刺激効果を利用して、理学療法、作業療法をより効果的に、またより容易にすることができる。たとえば筋緊張の強い筋強剛においては関節可動域訓練に際して困難を覚えるが、低頻度振動刺激とその筋に与えると筋の弛緩が得られ、徒手矯正を容易ならしめている。また一方不随意運動をとまらぬ疾患や筋緊張低下を来たしている下位運動ニューロン疾患などでは高頻度振動刺激を与えて固有反射の促進をうながし随意運動の容易化および神経筋系の強化を計ることが可能である。

以上につき具体例をもって報告する。

24. Neuro-Behçet 症候群の臨床的研究

十束 支朗・緑川 隆

(千葉大学神経精神科学教室)

窪田 靖夫

(同 眼科学教室)

小林 健正

(同 皮膚科学教室)

最近、Behçet 氏病に神経・精神症状の合併したものの (所謂 Neuro-Behçet 症候群) の増加の傾向がある。過去の経験例を集積・検討し報告する。

1) 25 症例中、男 18、女 7 例、発病年齢は 12~59 才 (平均 28 才)、死亡率 25 例中 4 例 (16%)。

2) 精神症状の発現頻度は、抑うつ感情、記憶・記憶力障害、痴呆症状各 11 例、幻覚 8、意識濁濁 5 (以下略)。神経症状の発現頻度は、腱反射亢進 16、四肢痙攣性麻痺 14、知覚鈍麻 10、脳波検査では、18 例中異常 12、境界 3、正常 3、髄液は 15 例に細胞増多症を認めた。その他、気脳写により脳室拡大、血清および髄液の γ -グロブリン増加、A/G 比低下を認めた。

3) さらに眼科教室における本症候群の発現頻度と眼科学的特徴についてふれる。